

新発田歩兵第十六連隊

原平鎮の戦闘

新潟県 茂岡 勇太郎

大正四年十二月、新潟県現加茂市中大谷に、農家の長男として生まれ、家業を継ぐべき立場でありました。家庭は父母、弟一人（のち戦死）、妹二人の六人家族でした。当時の国情からして、私は当然兵隊にゆかねばならぬと覚悟しておりましたので、学校卒業後、青年学校で学んでおれば、兵役三年が二年で帰れるということでした。

私は体格も良く均衡もとれていたもので、昭和十一年徴集者としての兵隊検査では、予想したように甲種合格でした。青年学校の教育は、軍隊の幹部候補生的な教育で、軍隊から帰ってきて、指導者となるため学問のみではなく、軍隊の実務も学校では優秀といわれていました。父母は今は元気でも、私が将来手伝って、

家業を継がねばならないし、早く帰らねばならぬという心掛けで一生涯勉強したつもりでした。従って学校も二年制があるのに、私は三年制を選んで教育を受けたのです。

昭和十二年一月十日、新潟県新発田の歩兵第十六連隊第二大隊第七中隊第六班、軽機関銃班への入営でした。私は生来、機械物の修理が好きだったので軽機関銃の分解、組立てなどは早く覚えることができました。しかし、一期の教育中の内務班は苦しいものでした。軍隊は団体行動であるので、一人悪いと連帯責任となる。折角寝たというのに「起きろ」という。毛布の中に入っても安閑としてはおられない。いつ、起こされるか分からないのだが、疲れているからいつの間にか眠っているのです。

私は、私的制裁であっても、教育的なものであっても、自分の落ち度はなくとも、指導的な目的のためならいいが、どこか落ち度はないかと見付けて叩かれる。これは厳し過ぎるのではないかと心の中では思っていました。

食缶当番で、冬は飯べらが凍ってしまふ。それを洗い方が悪いと起こされる。週番上等兵は備付け物品や衛生管理を見、何か落ち度を見付けて自分の威厳を表わそうとする。しかし、上等兵の個人差もあるし、人情のある人もある。

軽機班はとくに気合がかかっている。小銃と拳銃と軽機関銃の三つを持つこともある。小銃班は自分の小銃のみであるが、軽機班は三つを同じ限られた時間内にしなければなりません。班内には満州事変の残りの人もいました。勲八等、従軍徽章を持った人たちです。二、三年兵も一目置かねばならない人でした。

一期の検閲も終わった四月十一日、満州派遣の命令が発令され新瀉港を向しました。輸送船で玄海灘、朝鮮の東側、北鮮羅津港に上陸、十六日に濱江省一面坡の連隊本部、後藤部隊に着きました。私は第七中隊（岡本隊）に所属、葦沙河いさがに分駐していました。

わが第十三師団は満州で、私たち初年兵の教育はほとんど匪賊討伐でした。保安警察隊から「匪賊が出た」というので部隊命令によって出動するのです。しかし、

情報が漏れてしまうと逃げてしまった後だったことも多く、匪賊と警備隊とは真面目に戦闘はしたがらなかったようです。分駐時は、日夜、治安遣児、軍事訓練の明け暮れの毎日でした。

一個中隊の編成は、六個班二百人ぐらいでしょうか、当時は戦時編制ではなかったようです。軽機班は四五人、小銃班は三〇人か、戦闘をしながら軍事訓練、実弾射撃です。当時すでに、コンクリート製のトーチカは出来ていて、その四坪くらいの狭い中で軽機を撃つので右耳の鼓膜がやられる者も多かったようです。射撃と銃剣術の併用の明け暮れの訓練でした。

生活では、水は金臭いので一度煮沸して飲む。風呂は五右衛門風呂（底から直火焚き）。不衛生なため生水は飲めない。蠅が多いので蠅叩き当番もあって、一日何匹取ったか報告する。何しろ赤痢が多いのです。下痢をすると粘液便、次に赤便、一日何回も排便するようになる。

昭和十二年八月十八日、応急派遣の命令があり（支那事変勃発のため）、急遽一面坡を出発、熱河省承德

に到着。承德から、枕木、燃料を積んだトラックに、われわれ兵隊十五人くらいとその装具を積んで出発。戦闘準備をしながら、砂漠地帯を走る。道路ではなく砂の中ですから、先の車両の砂塵で後の車は先が見えない。体は砂だらけ、風呂に入る時間もない。樹木が少ないから、この付近では家畜の糞が燃料となる。また承德飛行場では内地送還の多数の戦死者の遺骨を拜む。やがてわれわれも同じ運命になるのかと、思いつつの進撃でした。

多倫を通過し山西省の戦線に入る。「パン・パン」と銃声をして、いよいよ戦闘開始となりました。

九月九日、天鎮、陽高をそれぞれ撃破し、十五日、軍事上の重要地点の大同攻略の大同作戦に参加しました。わが連隊は戦功抜群により感状（歩兵第二十八連隊、後藤部隊）を授与されました。

次に山西省原平鎮の戦闘について申し述べます。木が一本もない岩山で、日中は山から撃たれるので夜襲で隠密に行く。敵は銃眼から手榴弾を投げる。そのとき、武田大隊長が馬上で敵の狙撃を受けて戦死された。

私はなにかその予感がしたのです。原平鎮は城壁に囲まれていて、野山砲を何発撃っても破壊できない。そのため一日待機して大型砲（野戦重砲）を撃ち、それで突破口を開いたり、工兵隊が爆破したりした数カ所の穴から突入しました。

しかし敵はその突破口へ集中射撃をするので、わが方の犠牲は続出します。突入し、市街戦になったのですが、部落全部に足場を組んで上から徹底的に撃ってきます。岡本中隊長は眼鏡で敵状視察中、一発の狙撃で胸を撃たれ、歩哨は頭部に当たり二人とも即死された。私が当番をしていた佐藤曹長も戦死、結局中隊長以下七名の戦死者を出したのです。

この作戦は旧十六連隊や第三十連隊（高田）の各部隊によると一大包囲攻撃と、空陸一体の激戦でした。私は南門から第二番目に突入、わが第二大隊決死の突撃により占領できたのです。わが大隊長や中隊長の弔い合戦でした。部隊長は九州男児で幹部には厳しかったが兵隊はかわいがる。週初めの精神訓話は今でも思い出します。

市街戦になり、住民は逃げ遅れた者もいるが、「女子どもは殺すな。敵は徹底的に」との命があり、壮烈な市街戦で、彼我両方に数多くの死者ができました。戦場掃除は、二、三日続き、敵方の戦死者は土中に埋めました。しかし、後日、夜中歩哨に立っていると、掛けた土が薄かったためか、土中から屍体が立ち上がるではありませんか。生き返って起き出してくる屍体、不気味な音をたてて立ち上がる者、この世の地獄とはこのことかと、身の毛もよだつ思いでした。今でも原平鎮のことが気になります。

先にも申したように、中隊長、鈴木曹長、兵二人が市街戦最中に戦死された。当番である私は、いち早く駆けつけ、二、三の上官と共に遺体を安全地帯に安置、中隊長以下四名のご遺体を空き家に安置し、中隊長の当番兵と二人で遺体の屍衛兵を命ぜられました。城内では掃討戦の最中で、時間は夕暮れになりました。

城内は濛々とし、戦火、銃撃の煙が立ちこめている。突如、中隊長の当番が命令受領と二人の夕食のため本隊へ行くこととなりました。中隊長ほか三名の遺体安

置所に一人で蠟燭に火をつけたとき、付近の家から発火、煙が入ってきました。「大変だ」と蠟燭を消し、中隊長はじめ一人一人の遺体を三〇メートルほど先の安全な空き家に移動したのでした。

遺体の移動は大変な体験で、遺体を起こし両手を肩に掛けると、鼻血がでるなど、今でもあの勇氣はどうしてたのか不思議な思いです。しかも暗闇の中、よく移したなあと、当時のことを思い出すと身の縮む思いです。移動、安置して蠟燭に火を付けると、薄暗い光の中から付近の猫がでてきて、光る目玉が四つ、六つとあちこちから、不気味な声を出して遺体の白布を引っ張り、血痕の付着した部分をちぎる。不気味な目玉の数はだんだんと多くなり、払っても払っても数は増すばかりです。私は中隊長当番の帰りを待ちに待ちました。その間の一時間は私にとっては長い長い時間でした。その本部命令事項を聞き、夕食をとった時は、もう九時を過ぎていたと思います。

遺体移動の話、猫のことなど話し合っているとき、中隊の将校方が来た。小隊長などの焼香が続き、一晚

中眠る暇もなく夜を明かし、昨夜のことが本気になれぬ思いでした。中隊長や曹長、戦友たちのご遺体をお守りするという任務を遂行できたことを、いまだに忘れることはありません。この作戦で名誉の戦死を遂げた者は六百名とも七百名ともいわれております。

続いて、十二月三日、北支の軍事上の重要地点である山西省太原を攻略したのですが、北支那方面軍は、石家荘会戦後、太原平野に進出するように命じ、さらに大同作戦へと続いたのです。戦争は食うか食われるか、殺すか殺されるかで、実際に体験した者、死と直面した者でなければ分かりません。

原平鎮の戦闘では故郷加茂市出身の志田戦友が戦死していますし、戦友会で「初年兵は先に行け」と言われて屋根伝いに進んでいったら、後から上がってきた二年兵が撃たれて死んだという。今日でも「あのとき、後から続いて行ったら自分が死んでいる。先輩のお陰で助かった」という戦友がおります。生死はまさに紙一重、数秒の差が生死を決するのです。

十二月五日、太原入城後にわれわれは原隊へ復帰、

在滿州衛戍地（たふしゅう）に帰還しました。昭和十三年六月九日、今度は牡丹江省穆稜（ぼりやう）の新任地に向かいました。約半年間、ソ満国境において、それこそ実戦以上の猛訓練の連続でした。

十二月内地留守隊勤務のため、新潟県新発田の部隊に勤務しました。留守隊では、歩哨係、衛舎係と衛兵勤務等が続き、さらに現役兵、召集兵など二カ月くらの間、軍事教育をして、第一線部隊へ補充兵として出征させる連続でありました。私の現役解除は昭和十四年十二月五日付けです。

思えば、北支での作戦は進撃、進撃の連続で大変苦難の戦いでした。行軍中は足の下皮は剥け、肉が露出する始末。ただ気力、気力で歩くのですが、虱に食われ、壕に入ればサソリに刺され、食欲はなく、苦闘の連続でした。お国のため捧げた身とはいいながら、生命の限界と思ったことが何度あったかしれません。

北満におきましても、冬期の歩哨勤務は零下四〇〜五〇度。しかも二時間の歩哨は、足が痛く、吐く息は凍り、内地勤務では想像もつきません。このような時

母国を思い、家内のことを思い、北滿警備に任じてま
いりました。除隊後、昭和十九年九月再召集まで、地
方において青年学校、在郷軍人訓練指導として週二、
三日、区長、消防団として銃後の守りを勤めました。
わが事を顧みず戦場の勇士に思いをいたし、奉公の限
りを尽くしたつもりです。

【解説】

北支那方面軍の中部河北省作戦

八月末、内蒙古察哈爾作戦は有利に展開したが、第
五師団を反転することはできず、八月三十日、独立混
成第十一旅団を復帰させられた関東軍は、当時大同方
面に前進を続けていた。

中央は北支の作戦は保定付近に止め、察哈爾方面は
これに連続して平地泉、晋北の線として、依然山西省
に進入するような戦線の拡大は考えていなかった。そ
こで平地泉以東、内蒙古察哈爾は関東軍部隊をして警
備せしめ、第五師団は蔚県からなるべく速やかに、南
方京漢線方面に退げる考えであった。

しかるに関東軍蒙疆兵団（関東軍参謀長東條英機中
将直接指導）は、大同を占領するや「約二個師団の増
加を得て、北部山西省に進入作戦を指導し、河北省作
戦に相呼応するを要す」という積極的な意見を具申し
てきた。関東軍はもっぱら北方に対する対ソ戦を準備
すべき性質のもので、すみやかに関東軍に手を切らせ
る必要が感ぜられていた。というが、山西省の作戦は
関東軍の考えによって行われたと、公刊戦誌の中で述
べられている。

太原に向かう作戦

石原参謀本部第一部長は、極力山西省に戦面を拡大
する作戦に反対していた。東條関東軍参謀長と第五師
団長板垣征四郎中将は、しきりに太原攻略を具申して
きた。石原部長がその職を去ると、武藤作戦課長は太
原攻略を命令すべきであるという意見を主張し、下村
新作戦部長と多田次長もついに同意した、とある。

このように不拡大は拡大へと転じ、中央部は、十月
一日太原攻略を決した。同日、北支那方面軍司令官は
第五師団をもって北部山西省に作戦して太原を占領す

べきを、また関東軍司令官には、北支那方面軍の作戦を容易にするとともに、おおむね内長城線以南（承德方面）に進出している関東軍所屬部隊を、北支那方面軍司令官の指揮下に入らせるよう命じた。関東軍部隊は代州を發し、十月四日から崞県、次いで原平鎮を攻撃し、執拗な山西軍の抵抗を排除してこれを占領した。北支那方面軍は十月十七日、第一軍の一部に石家莊会戦後、正太線方面から太原平地に進出するよう命じ……。

原平鎮南方の忻口鎮付近の山西軍兵力は約十四個師と判断され、その陣地は半永久的に堅固に構築されていた。第五師団は関東軍部隊を加え歩兵約十八個大隊、野山砲以上の火砲九五門を有していた。

このように北支に増援された関東軍部隊に茂岡さんの師団が含まれ、特に原平鎮の作戦、戦闘で大隊長、中隊長以下上司が戦死されたわけである。

昭和十二年七月七日、支那事変勃発、八月十八日、関東軍命令で部隊は一面坡（満州濱江省珠河県）より

応急派遣、承德（熱河省承德県）からトラックで出發。九月九日、天鎮、陽高（山西省北部大同東北方）撃破。十五日、大同攻略。十月十日、原平鎮の戦闘。十二月三日、太原入城。十月五日、原所屬復帰のため満州帰還とある。約三カ月間の北支の作戦従軍が本聞き取りの主要な部分である。

戦地、蒙疆

軍人と民間人の苦勞

長野県 春日 大喜治

私は農家の三男として上伊那郡旧西春近村で生まれました。長兄は昭和六年、北朝鮮へ入宮しましたが、満州事変勃発で除隊ができず、私有家の農業を継いでいました。二兄は幼児の時、熊蜂に刺され死んだということでした。大正五年生まれの私は、昭和十二年徴集兵として兵隊検査を伊那町で受けましたが、第一乙種でありました。当時、第一乙種は現役でなく補充兵